パリ断想

江　藤　价　泰
（法学部教授）

はじめに

今回の短期留学（1993年５月21日から11月４日）で、見聞したことの一端を、思いつくままに書いてみようと思う。

落書　パリ到着後10日も経っていない５月29日（土）に、旧知の友人宅に招待された。アペリチフを飲みながらの雑談の中で、「パリに今度来て、前と変ったな、と思うものがあるかい」といわれた。12年前の２年間の滞在時と比べて、たしかに変ったものがいくつかある。「十年一昔」というのだから、変らない方がおかしい。「さて、何だろう」とあらためて、10日に満たない滞在期間の印象を、懸命に整理してみる。最初に浮んだのは、公衆電話がジゥトン（公衆電話用のコイン）方式からカード方式に変っていることである。次は、そう、ドゴール空港のターミナルが２つになっている。落書がやたらに多いな。それに食料品店がアラブ人経営に変っているようだな。どうやら、この４つ位か、とまず下手な作文をして、たどたどしいフランス語で答えた次第。いつまで経っても、会話はうまくならない、とこれを書きながらもあらためて思っている。

それはさておき、落書であるが、これは実に多い。もっとも、スプレーでやっているようであるから、書くという表現は、あるいは当らないのかもしれないが。それにしても、およそ書ける場所ならどこにでも書くという具合なのである。他人の家の屋根に登らなければ書けないようなところにもあるし、メトロの駅の転落覚悟でなければ、それにしてもよく登ったものだと感心？するような場所にもあるし、もちろん、電車の車体にも書かれているし、メトロの高架になっているところから窓外をみると、ある、ある、いたるところにあるのである。

競って難しいところ、難しいところに書いているようである。転落事故もあったのではないか。一体いつ書くのだろう。夜書くとなると、危険は一層大きくなるだろうし、そうかといって、昼間書くわけもないだろうし、等等、落書をみるたびに考えていた。もっとも、これらの落書の大半は、私には、なにを表現しているものなのか、殆んどわからなかったが。

留学中の娘に聞いたところ、これらの落書は、tag（タグ）、書いている人はtagger（タガー）とよばれていること、郊外に住んでいる若者がパリにでてきて書いている、といわれていること、1日中ひまな人達だから、夜とは限らず、昼間でも書いていること、最近は、この流行？も大分下火になってきていることなどを教えられた。

いずれにしても、これに投入されているエネルギーは相当なものだ、と思う。しかし、これが、若者の社会に対する欲求不満の表れであり、またその背景に、若者の就職難、大量の失業があるとするならば、看過することのできない社会問題であるように思われた。いわゆるルペン現象をみるならば、あながちこのように考えることも、全く的を外したものとはいえないのではないだろうか。その意味からするならば、最近下火になってきているということは、フランスにとって慶賀すべきことといえるであろう。

アラブの店　食料品店が、アラブ人経営に変っているような印象をもったのだが、それは、たまたま、私の住んでいた13区特有の現象かもしれないと考え、その後、本を買いに行くとき、友人宅を訪問するときなど、出歩くたびごとに注意してみていると、どうやらこれは、パリ市内に普遍化しているように思われた。もっとも、ここでアラブ人といっているが、これはいわゆる人種的な意味でのそれであって、国籍ではない。国籍からすれば、おそらく殆んどの人は歴としたフランス人であろう。また、アラブ人と目する理由は、と問われれば、マグレブ諸国（モロッコ、アルジェリア、チュニジア）を2度訪問した経験からの判断というよりほかはない。

ところで、この僅か10余年の間に、なぜこのような変化が生じたのであろうか。これについて、私のヘボ碁仲間の画家達（30有余年滞在3人、20年余2人）に、私の歓迎碁会の折に尋ねてみた。彼等は、異口同音に、スーパーの発展をあげていた。もっともスーパー経営がフランスで行われだしたのは60年代に入ってからだそうである。フランス人の商店主からアラブ人の商店主への交代も、この頃から徐々にはじまり、80年代のはじめには半分位になったのではないか、という。要するに、スーパー経営に太刀打ちできずにフランス人の商店主が店を手放す。それをアラブ人が買って経営する。「彼等は商才があるし、よく働くからね」というのが結論であった。「成程、そういうわけか」と一応納得した。これから書くのは、この結論に対する私の体験的追試である。

スーパーの発展とスーパー間の競争には、相当にはげしいものがあるようである。店舗数もわが国に比較すると実に多い。たとえば、私のアパルトマンから5、6分の距離に2店舗（いずれも支店）、7、8分に2店舗もあり、閉店したままなのが、2分ほどのところにあった。これらの店は、生鮮食料品（肉、魚、牛乳、卵、野菜、果物等）、

冷凍食品、酒類、雑貨、洗剤、台所用品、文房具等の日常生活必需品を売っているし、売場面積も東京のわが家の近くにあるスーパーよりもはるかに広かった。そのうちの1店は、2階に日常的な衣料品、婦人・子供服、旅行用品等まで置いていた。しかも、競争を意識して、それぞれが特色を誇示し、価格競争もなかなかはげしい。そのうちの1店は、閉店時間の延長（月〜金、午後9時まで、土は午後7時まで）まで行なっている。とても、フランスとは思われないような競争である。したがって、消費者にとっては、利用するにまことに便利な状況が現出しているといってよい。それに、円高に加えて、一般に、生活必需品はわが国に比較してはるかに安いから、滞在生活は、楽であった。ついでにいうと、交通費（メトロ、タクシー料金、航空運賃等）、住居費等も安い。実質賃銀を比較すると、わが国の勤労者の賃銀は国際的にみて高水準にあるとはいえないのではあるまいか。

スーパーとの競争　それはともかくとして、このようなスーパーの進出・発展の影響を直接に蒙らざるをえないのは、前述のように小資本の食料品店である。まず、価格競争の面で、とても対抗できないからである。そこで、撤退・交代という現象がおきる。交代しても、条件は変らないのであるから、経営は相変らず成り立たないのではないか、と思われるであろう。ところが、そうではないのである。それは、結局のところ、前述の「彼等は商才があるし、よく働くからね」ということに帰するのであろうが、私のみるところ、それは、具体的には次の4つにわけることができるように思われる。それによって、スーパーと、ともかく競争して生き抜いていると考えられる。

第一は、勤勉である。交代前と異なり、アラブの店は、年中無休であり、朝早くから夜遅くまで開いているのが普通である。私のアパルトマンの1階にある店は、朝は8時前、夜は10時過ぎまで開いていたし、共同経営者と称する若者は、ついにヴァカンスをとらなかったといっていた。これは、「人生を楽しむフランス人」にはとてもできることではない。年中無休、開店時間の長いこと、どこに住んでいても、ほんの一走り位の距離にある立地条件が、結構利用率を高めているようである。しかし、私のアパルトマンの1階の店をいれて、3軒も同じような店があったから、その間の競争は大変だろうと思った。

第二は、あらゆる商品の価格を、スーパーより高めに設定していることである。店内は、スーパー式で、店の前に野菜果物の台を並べている。これが普通である。品質は、スーパーより良くないが高い。ミネラル・ウォーター、ワインを例にとると、3割高位になる。しかし、スーパーで買物をしそこなったり、重いミネラル・ウォーターを運ぶ労を考えたりすると、これらの店を利用することになる。立地条件を生かした上

手な経営ともいえそうである。

第三は、スーパーと競合しない商品を扱っていることである。たとえば、プロパンガス、新聞、週刊誌、ＤＰＥ等、多様である。食料品店からよろず屋へ転化したといってもよいようである。ここにも、商才が現れている。

第四は、家族経営乃至一族経営であるから、過重労働でも、従業員には事欠かないという利点がある。

このように、アラブの店は、健闘しているのであるが、果してこの経営形態、ひいては労働条件が、いつまで続くかという疑問は残る。現に、私の下の店の若者は、ヴァカンスもとれなかったとこぼしているし、彼の１日の拘束時間をみても、14時間を下まわることはない。良くやっている、と感心はするが、正常なものでないことも確かだからである。

道路工事？　私のアパルトマンの前は、道をへだてて、リセ・ロダン（ロダン高校）の裏庭となっている。この高校は、その名が示すように、美術系の学校ということであった。裏庭には、プラタナスの巨木が10数本あり、なかなか良い借景となっていた。

６月末、そろそろ高校も休みになる頃のある朝、時ならぬ轟音で眼を覚まされてしまった。何事ならんと飛びおきて、窓を明けてみると、道路工事の掘削の者であった。時計を見ると、８時少し過ぎ、朝早くからかなわんな、これが毎日続くとなると、宿替えを考えなければならないかもしれない、面倒なことだ、と一寸憂鬱になった。

３階（日本式、フランス式では２階）から見下ろす形になるので、下で働いている人の視線を余り気にする必要はない。掘削工事用の自動車、板を積んだトラック、それにいつの間に運んできたのか小さな車輪のついた倉庫のようなものが、道の手前と向い側に１個づつ置いてある。道で働いている人は10数人。アパルトマンの斜め前に高校の裏門があるのだが、入ってすぐ右の空地で５、６人の人が図面らしいものを拡げてなにか相談をしている。道路工事なのに、なぜ、高校の中に入っているのだろう、妙だな、とそのときは思った

掘削の轟音は、11時少しすぎに止んだ。また見下すと、自動車は帰るところであった。道を横断して大きな溝が１本掘られていた。相当に深そうである。変な道路工事だな、これで終りなら助かったと思った。そのうちに、板に釘を打ちつける音がする。また見にゆく。さっぱり仕事にならない。現場をみてやれ、と出かけた。溝の幅は１米位、深さは２米位、歩道も掘ってある。リセの裏庭では、穴掘りの真最中。これで漸く、道路工事なのではなく、リセに関係する工事であることがわかった。しかし、何の工事だろう。これは、その後の工事の進展で、ボイラーおよび配管の取換え工事であるこ

とがわかった。

溝の中では、歩厚い板を壁に並べ、簡単にいえば箱を作っているようである。どうやら、幅、深さに合わせて板は切ってきたようである。フランス人にしては、能率よくやるな、水道工事、それにしては変だな、と思いながらも、一応満足して部屋に戻った。

午後外出して，夕方帰ってきたところ、自動車が走っている。朝はたしか通行止めになっていたはずだが、と溝のところにいってみたら、溝のところにアスファルトが流してある。箱をつくり、応急的に自動車が走れるようにしたのである。フランス人もやるな、とあらためて感心した。

フランス人の勤勉さ　この工事は、6月末から9月末までかかった。ヴァカンスで8月23日から9月6日まで留守をした以外、毎日、いや応なしに工事を見学させられたことになる。もっとも外部工事だけであるが。この種の工事をみたのは、はじめてであったから、なかなか面白かった。

日本で、この種の工事を見学したことはないし、またその知識もないから、比較はできないのであるが、いくつか気のついたことがある。その1つは、フランスの労働者の勤勉なことである。朝8時に仕事をはじめ、12時から1時までは昼食、1時から5時まで作業であるが、実に真面目に働いている。それに監督らしい人物がいないのである。第二次大戦中の勤労動員の私の経験では、監督に追いまくられていたので、これはまことに不思議に思えた。工場単純労働と違って、それぞれが熟練工として、自分の判断と腕で仕事をしているからなのであろうか。

移民問題　たまたまある朝、少し早く起きてバゲットを買いにいった。丁度8時位に、前記の倉庫の前を通った。アジア系らしい労働者が中心になってミーティングらしいものをやっていた。今日の手順の打合せなのであろう、と思った。この日は、主に電気関係の仕事をしていた。それから注意してみていると、日によって、仕事、職種が、異なるように、その中心人物が、白人であったり、アラブ人であったり、ときには黒人であったりした。彼等の共通言語は、いうまでもなくフランス語である。

ここであらためて、フランスは、多民族国家であることを考えさせられた。フランスの公共の建物には、必ず自由・平等・友愛(Liberté、Égalité、Fraternité)、フランス共和国の標語が書かれ、三色旗が翻っている。この標語は、今やますます尊重され、実体化されなければならないのではあるまいか。このことは、単一民族国家と誤って喧伝されたわが国においても全く同様であるが。

それはともかくとして、フランスに移民として入ってくる外国人の出身者は、時代とともに変ってきている。19世紀後半には、ベルギー人、ついでイタリア人。1901年の

統計では、当時の移民総数103万４千人のうち、イタリア人33万、ベルギー人32万３千、７、８万人台がドイツ、スペイン、スイスとなり、その後、ポーランド人、スペイン人が増え、第二次大戦後、とくに1960年代以降、ポルトガル人、アルジェリア人、モロッコ人が増加し、いわゆるマグレブからの移民とその子孫が約250万、このうちの100万人はすでにフランス国籍を取得している、といわれている（塚本一・知恵大国フランス171頁以下、講談社1992年）。

おわりに　経済の不況、失業増加を背景として、フランスの極右「国民戦線」は、「外国人がフランス人の職を奪っている」と経済不況等の責任を、移民外国人に押しつけて、かなり幅広い庶民の支持を得ている。このような現象は、ドイツのネオ・ナチの抬頭にもみることができる。ドイツでは、トルコ人が標的とされているのに対し、フランスではアラブ人が標的とされている。

フランス人がアラブ人をうとましく思うようになった理由の１つには、イスラム教徒がフランスで、ことさらに“違い”を示して自己主張するようになったことがある、といわれている（前掲書176頁）。

たしかに、同じキリスト教徒であるベルギー人、イタリア人、スペイン人、ポーランド人等とは、異質な困難な問題がアラブ移民の場合にはあるといわざるをえない。この問題についてのクロード・シェイッソン元外相の発言は、貴重である。「…イスラム教は精神的にナイーブなものではなく、他の宗教に比べ、（生活規範でもあることで）よりグローバルな宗教であるため、イスラム教徒のフランス移住がよりむずかしい問題を引き起していることは事実だ。…私がいいたいのは、フランス社会の影響力によって、フランス移住のイスラム教徒たちがイスラム教を捨てるようになることでなく、彼らの生活習慣が“非宗教化（世俗化）”されるということだ。私はイスラム教徒のフランスへの移住は、われわれの将来にとって（実りをもたらす）よい機会になるものだと思っている」（前掲書183頁）。ここには、フランスの伝統に対する強い信頼とサラセン文化を築いたアラブ人に対する信頼とがともにあるように考えられる。

「国民戦線」的発想は、歴史を逆行させ、人類を破滅の道へ導く以外の何物でもないと考えられる。人間の尊厳を基調とした民族相互の信頼こそ、移民問題を解決する基礎となるものではないか、と思う。